

福沢正男



カット：中野日出男

出 門

中学を卒業した高垣純平は就職することになった。家が貧しかったからである。父は初めから純平の進学の事など考えておらず、本妻の子で純平の異母兄である誠に純平のことを頼んだ。誠は純平より七つ年上で、岐阜市の小さな鉄工所で働いていた。父は純平をそこで働かせようと思ったのだ。六十を過ぎている父には「就職させる」というより「奉公に出す」というつもりだった。そしてその事は純平には一言も相談なく決められた。純平は自分の将来が人に決められるのをちよっと不審に思ったが、別に腹も立たなかった。自分には何もわからないのだから仕方がないと思った。

「よくわかつてる所で働くのが一番いい」 父はよくこう言った。純平が高校へ進学したい希望を言っても、

「やめとけ。誰でもそのくらいになれば働くもんだ。それが本当だ。」

と言うだけで、全然相手にしなかった。

中学三年生になってやっと好きになった学校をやめ、住みなれた名古屋を離れて誰も知る人のいない遠い所（彼にはそう思われた）へ一人で行ってしまうのが嫌だった。しかし、何とはなく反対出来なかった。自分はこうなるもののだと純平は思った。

卒業式の夜、父がもうすぐ兄がくるから準備しておけと言った。純平は段ボールの箱に、学生時代の教科書や参考書、ノート、本、学校のアルバム、それに中学一年の時父に買ったもらった小さな天体望遠鏡など、つまり彼の持ち物全部をつめ込んだ。仕事に着る作業服だとか靴とか下着などが必要だとは少しも頭に浮かばなかった。自分のものを全部もって行かねば気が済まなかった。

卒業して三日目の夜に誠が迎えにきた。誠は純平の身支度を嘲笑して叱った。

「たわけ！ こんなものもっていってどうするんだ。学校へ行くんじゃないぞ。お前、何着て仕事するんだ。もつというものがあるだろう？ こんなもの持ってくなよ！」

誠は性格的にも人に不親切で、特に純平には腹違いの弟という事からいい感じを抱いていなかった。

「仕事着と靴、タオルと石けん、歯ブラシ、なんにもあれせんじやないか、バカ！」

純平は悲しくなった。誠が憎らしくなった。叱られた事より、自分のものが持つて行けないことがつらかった。

父はせん別のつもりで純平にジャンパーを買ってやった。そして誠に五百円渡し、

「これであるもん買ったってくれや、頼むで」

「はい。ま、連れてつてみるよ」

「うん。おい、純平、これ穿いていけや」

父は自分の革靴を出してボロ布で埃を払った。つやはあるが、流行遅れの先の丸い黒靴だった。純平はイヤとは言えなかった。素足に穿いてみるとダブダブで気持ちが悪かった。

「じゃ、遅くなるからもう行くよ。また来るでね」

「ほい。しっかりやるんだぞ」

父は純平を励ました。出来るだけの事はしてやったという満足が顔に出ていた。

「うん、行ってきます。」

純平は元氣なく父に別れを告げ、誠に従った。

坊主頭に学生帽、ジャンパーと学生ズボン、素足にダブダブの革靴、片手に作業服にする学生服の古着が入った風呂敷包み、こうしたいでたちが純平は氣恥かしかった。人の目が氣になった。

「岐阜って遠いの？」

「お前、知らんのか？」

「名前は知ってるけど、行った事ないよ」

地図で見ると、小さい時行った死んだ実母の在所の大阪よりは近いというだけで、感覚的にどの位の所なのか純平にはまるでわからなかった。

「遠え遠え所さ。もう帰れんかもわからんぞ」

誠はニヤニヤして言った。純平はいよいよ心細くなった。

名古屋駅行きのバスに乗った。人がじろじろ見るのが純平にはよくわかった。話の続きで誠に話しかけると、

「あまりしゃべるな」

と叱られた。誠も純平のみなりが氣になっていたのだ。純平は何か悪いことをした様子うつむいてしまった。

名古屋駅へ着くと、今度は名鉄電車に乗った。乗継ぎをするという事が、純平にいかにも遠くへ行くのだという感じを与えた。この電車に乗ったらもう帰れないのだと彼は思った。何か悲想な心持ちだった。

電車の中で、純平はこれからどうなるのだろうと考えた。ただ与えられた境遇の中でやらなければならないことをやればいいのだ、そうすれば生きていけるのだと思った。それは諦めだった。寂しさや悲しさに対し、純平は諦めによってそれらに打ち勝とうとした。

学生時代の事がしきりに思い出された。好きだった体操をよく一緒にやった者、学校の

帰りに歴史年号の暗記競べをやった者、音楽が出来た純平の所へ聞きにきた者、みんな高校へ行ける者たちだった。入学試験は一昨日だった。みんな受かっただろうか。

純平はふと涙ぐんだ。同級生達を羨めば羨むほど、自分の境遇が悲しかった。

岐阜での生活は、純平にとってやはり面白くなかった。慣れない仕事、対人関係、寮生活など、全てが始めての経験だった。

鋳物の部品の表面をヤスリで滑らかにするとか、油の着いた布ヤスリ（ペーパーという）で太い鉄パイプを磨くとか、そう言った仕事が一体何の意味を持つのか、自分に取って何になるのか、純平には理解できなかった。

先輩の同僚達は純平のことを「坊、坊」と呼んだ。「高垣君」とか「純平」と言ってくれるのは誠と社長の奥さんだけだった。誠でさえ仕事中人前では「坊」と呼んだ。純平はみんなに物笑いにされているような気がした。

寮は八畳の部屋に、純平と誠と、もう一人二十才位の男との三人で住んでいた。毎朝と日曜日の部屋掃除はすべて純平に負わされた。誠達にしてみれば一番年下の純平がやるのは極めて当然の事で、何の呵責も感じていなかった。が純平には大いに不満だった。

誠は何かにつけて純平を叱ったりイヤ味を言ったりした。そして使い走りかなんぞの様に純平を使った。もう一人の男も誠の真似をした。

純平は初め誠を「兄さん」と呼んでいたが、誠は異母兄弟と言うことを人に知られるのを嫌がり、「イヤらしいから竹内さんと呼べ」と言った。誠にしてみれば純平は父の女道楽から生まれた不義の子であり、かわいがる気持ちなど少しも起きなかった。純平は戸籍上は私生児になっており、死んだ実母と同じ「高垣」を苗字にしていたのである。

父と同じ「竹内」の苗字は純平には変に呼びにくかった。日が立つにつれ、それも慣れたが、もう誠を兄とは思えなくなった。他の同僚の噂でも誠はよく思われていなかった。

仕事を始めた一週間位は毎日涙が出た。寂しいやりきれない気持ちの日が続いた。夕方仕事を終えでも格別することはなかった。行きつけの大衆食堂で長くねばったり、寮でテレビを見るくらいだった。会社の近所に小さい公園があったので純平はよくそこへ行った。背の低い鉄棒で学生時代習い覚えた技をやってみたり、ブランコに乗って子供達の遊びをボンヤリ眺めたりした。シーソーに寝そべって学生時代の事を思い出し、よく涙ぐんだ。夕焼けの空がよけいに彼を感傷的にした。

しかし純平はよく働いた。先輩達の言うこともよく聞いた。不満や愚痴など少しもこぼさなかった。新しい生活に慣れて来ると、ある程度の余裕もできた。もうあまりメソメソしなくなった。岐阜駅の方へ出てみて本屋を巡ったり、同級生達に手紙を書いたりした。出した手紙には必ず返事が来た。愚痴っぽい純平の手紙に対し、暖かい思いやりが込められていた。自分が忘れられていないことを純平は嬉しく思った。定期的な文通なども始まった。純平は少しづつ元氣を取り戻し、ここで何をすべきかを考える様になった。

四月中頃に岐阜祭りがあり、会社が二日間連休になった。その時純平は初めて名古屋に帰った。まだ一ト月も立っていないのに随分久しぶりの様に思われた。

純平の父はびっくりして彼を迎えた。そして機嫌良さそうに純平の新しい生活の事を聞いた。純平はやや得意げにつらいこと、苦しいことを話した。「それ位は当り前だ」と父が言った。父から慰めの言葉を期待していた純平はそれが不満だった。岐阜の生活の事を誰かにわかってもらいたいと思った。

ふと、純平は島口を訪ねてみようと思った。島口は中学生時代最も親しかった友人で、よく一緒に鉄棒の練習をした仲だった。彼は進学希望だったので、受験をパスしたかどうか知りたかった。出来たら久し振りに鉄棒もやってみたかった。彼の家には高さを自由に変えられる鉄棒があった。

その日は日曜日だった。純平は昼食後、島口の家へ行った。

「島口くん」

木の門を通って、純平は玄関から呼んだ。「ハイ」という女の声が出た。島口の母が出てきた。

「あのー、島口君いますか？僕、高垣純平っていう中学時代の友達ですけど」

「ああ、高垣君。あの手紙くれた人ね。ちよつと待ってね。まだ寝てるのよ」

島口の母は奥へ引つ込んだ。

「幸雄君、お友達よ。いい加減に起きなさい」

そんな声が聞こえた。母親にそんな風に起こしてもらえる島口を、純平は羨ましく思った。それにしても午後まで寝ているというのは驚いた。

「やあ、久し振りだね。急なものでこんな格好でごめん」

バジャマ姿で眠そうな目をして島口が出てきた。

「来る時、前に言ってくれるといいのに。顔を洗って御飯食べる間、上がって待っててくれよ」

純平は島口の部屋へ通された。島口の父は某会社の営業部長をしていて、暮しは裕福な方だった。家も広く清潔だった。

島口の部屋には、机と椅子、ベッド、それに本棚が二つあった。本棚は参考書がほとんどで、いかにも受験生の部屋らしかった。机の上には夕べの残りらしい菓子とサイダーの空きビンとコップ、そして英語の教科書らしいものが開いたままになっていた。純平はそんな様子が胸にせまった。あまりに今の自分と違っていた。羨しかった。

やがて島口が来た。

「やあ、待たせて御免。今、試験中でね。夕べちよつと遅かったもんで」

「試験中か。悪いことしたな。別に用事らしい用はないんだ。早く帰るよ」

「いいよ。そう大事なテストじゃないから。七月に中間テストがあって、それが大事なんだ。ゆっくりしていつてよ」

「高校は受かったんだね」

「うん、お陰様だね。明和が受かったよ」

島口は今年の二月にある私立高校を受けていたが、それはもし第一志望の明和高校をパ

スしなかった場合の為で、私学入学金の五万円は無駄になっていた。入学を取りやめた場合、私学は入学金その他の納入費を一切返却しないのだ。純平はそのことを聞いたとき、複雑な気持ちになった。色々な家があるものだと思った。

純平と島口が親しくなったのは中学三年になってからだ。純平のクラスに体操クラブに入っている者がいて、純平は彼から鉄棒を教えてもらった。一つ一つ新しい技を覚えていくのが非常に面白かった。体操クラブの鉄棒は一般の者には使用させないので、純平は運動場に備えてある鉄棒でよく練習をした。そこへよく島口が来ていたのだ。島口は純平よりずっと上手で、人に見せつけがましいところが感じられず、純平に好感を抱かせた。やがて二人は話し合うようになり、下校も一緒にすることが多くなった。

そのうち進学する生徒達に対して受験のための補習授業が始まった。純平は就職だったので普通授業を終えるといつも一人で鉄棒の練習をした。島口も補習を終えるとやって来た。そして二人で暗くなるまで遊んだ。

帰り道ではよく二人で勉強の話をした。島口は純平が就職するにもかかわらずよく勉強していることを一種不思議な思いでとらえた。身につまされる思いをする事もあった。

純平にしてみれば別に目的があつて勉強していた訳ではない。言ってみれば他の者に負けたくなかったのだ。

「あんた、どうしてそんなに勉強するの？」と、ある女生徒が純平に聞いた時、彼は返事に困って何も言えなかった。

純平はよく先生や他の生徒から惜しいと言われた。彼は内心それが得意だった。勉強が好きなのに高校へ行けないことが、何か自慢の様に思われた。しかし卒業が近づくにつれ、やはり進学できない寂しさをひしひしと感じる様になった。島口もあまり鉄棒の所へ来なくなつた。家で帰りの遅いのを咎められたのだ。それでも土曜日などはやはり一緒に来た。純平にとって島口は、進学する者達から取り残されない為の唯一の絆であつた。

純平は島口から高校生活の事を色々聞いた。聞いているだけでも楽しかった。そして自分の高校生姿を想像してみるのだった。

「クラブは何に入つたの？」

「体操部だよ。ちよつと本気でやってみようかなと思つて」

「あ、ほんと。やっぱりな。他の一年生はどう？」

「大した事ないよ。初めての奴が多いんだ。車輪出来るのは僕だけらしい」

「そうかあ、君はうまいからなあ。どう？ちよつとでいいからやらない？」

純平はさつきから考えてした事を提案した。

「うん、やろうか！」

で、二人は庭へ出た。互いに批評し合いながら夕方まで鉄棒を続けた。純平は久し振りで手をはたき痛めたが、心は非常に楽しんでた。これ程楽しんだのも久しぶりだった。

暗くなつた頃、庭へ島口の母が出てきて純平に晩御飯を食べていくように勧めた。純平

は初めて島口の家で御飯をよばれた。島口の父母が一緒だったので少し堅くなったが、非常にうまいと思った。

島口の父は時々純平に話しかけて、純平の家の事や岐阜での事を聞いた。純平はそれらの質問に素直に答えた。

「まあ、しっかりやりなさい。若い時の苦労はしておいて損はないからね」

と島口の父が楊子を使いながら言った。純平は、「はい」と答えたが、ちよつと不満だった。しないで済むなら苦労などしたくないと思った。

八時頃、純平は島口の家を出た。外は肌寒い風が吹いていた。空もどんよりしていた。純平はものすごい寂しさに襲われた。目に涙が浮んだ。これから又岐阜へ帰るのだ。帰らなければならぬのだ。もう帰りたくない。もっと島口の家になりたい。島口ともっと話したい。彼は自分がそうでありたい空想を一杯に描いた。学生服を着て、鞆を下げバスで学校へ行く所。教室で隣の生徒と数学の話をしている所。運動場でクラブ活動をしている所。家で勉強している所。

純平の目の前は闇だった。彼は不気味さより悲しさを感じた。重い足をゆっくり運んだ。一旦家に帰り、父と少し話をして九時頃家を出た。一ト月前、同じ道を誠に連れられていった。今夜は自分で歩かねばならないのだと純平は思った。

岐阜の寮へ着いたのは十時半頃だった。誠ともう一人はもう寝ていた。誠が物音で目を覚ました。

「今頃まで何をやってるんだ？ バカ！ もっと早く帰らにやいかんぞ！」

険のある声で誠が言った。

「はい」

純平は詫びるように小さく返事をする、音を立てぬ様に自分の布団を敷いた。そして着替えて横になった。

「純平」

「はい」

「今日お前、朝、便所の掃除せんと行つたろう？」

「はい」

「いかんぞ。あした少し早く起きてやつとけ！」

「はい」

純平は布団に潜り込んだ。そして声を立てぬ様にして泣いた。悲しかった。そして悔しかった。涙は中々止まらなかった。

三十分程純平は泣いていた。純平は泣きながら、しかし胸の中を何か潮のように満ちてくるものを感じ出していた。初めのうちはそれが何なのかわからなかった。

純平の目が布団の中ではっきりと見開かれた。彼は満ちてくるものを知った。それは意欲だった。自分のしたいことをしようという意欲だった。

「勉強しよう」

純平はそう思った。胸の潮ははっきりと目的を定められた。そして前にも増して押し寄せ、純平の全身を襲った。純平は布団から首を出した。天井をジッと見すえた。窓を通して入って来る光にボンヤリと天井の棧が見えた。

「勉強しよう。英語も数学も物理もみんな覚えてやる。島口は高校へ行って覚えるだろう。俺は自分で覚えてやる。負けない。負けたくない。一生懸命勉強しよう！」

その夜、純平は中々寝疲れず、全身を襲っている意欲のまま、色々な計画を頭に描いてみるのだった。